

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書

## 曲松遺跡

2013

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

## 曲松遺跡発掘調査報告

**調査の経過** 曲松遺跡は豊橋市大岩町曲松に所在する。発掘調査は、県道小松原二川停車場線改良工事に伴う事前調査として愛知県教育委員会を通じた委託事業である。調査面積は330㎡、調査期間は平成24年5月7日～25日である。調査担当は当センター調査課松田訓（調査研究専門員）と永井邦仁（調査研究主任）である。遺跡の位置は、北緯34度43分19秒、東経137度26分36秒である。県遺跡番号は790568、県埋文遺跡記号は4TMGである。調査工程は、表土・遺構掘削を（株）波多野組、測量を（株）フジヤマが実施した。

**地理的環境** 遺跡は豊橋市の東南部に位置し、三河湾へ西流する梅田川の左岸台地上に立地する。梅田川の河道は比較的最近まで蛇行しており、地割などにその痕跡がみられる。その梅田川と南から流下する沢渡川との合流点南西側に曲松遺跡が所在する。そのため遺跡地は南から北へ向かって下り傾斜となっており、地表面は標高で21～23mの幅がある。一方梅田川右岸は三遠国境となる弓張山地の南端が迫り、梅田川までの狭小な平坦部に近世東海道や鉄道（JR東海道新幹線など）が寄り添うようにして東西方向に延びている。



図1 曲松遺跡の位置（1/2.5万「二川」）

**周辺の遺跡** このように河川で三河湾沿岸とつながるとともに、地峡を主要交通路が抜ける地理的環境は、当該遺跡を歴史的に評価する上で重要な要素になる。周辺で確認されている遺跡の多くは古代～中世の窯業遺跡で、遺跡西方の苗畑古窯跡群は灰釉陶器・緑釉陶器や瓦の生産地である。その北側台地縁辺には本郷遺跡があり、古代の掘立柱建物や中世の屋敷地が検出された。古代窯業生産の拠点を端緒に成立し、中世は近世東海道二川宿成立まで続いた、地域における中核的集落と考えられている（岩瀬2002）。



図2 曲松遺跡周辺の遺跡分布（1/2.5万「二川」）



調査前風景 (南から)



表土掘削 (12Bb区、南から)



遺構検出 (12Bc区、北から)



遺構完掘 (12Bc区、南から)



トレンチ掘削 (12A区、西から)



T2完掘 (12A区、北から)



調査完了状況 (南から)

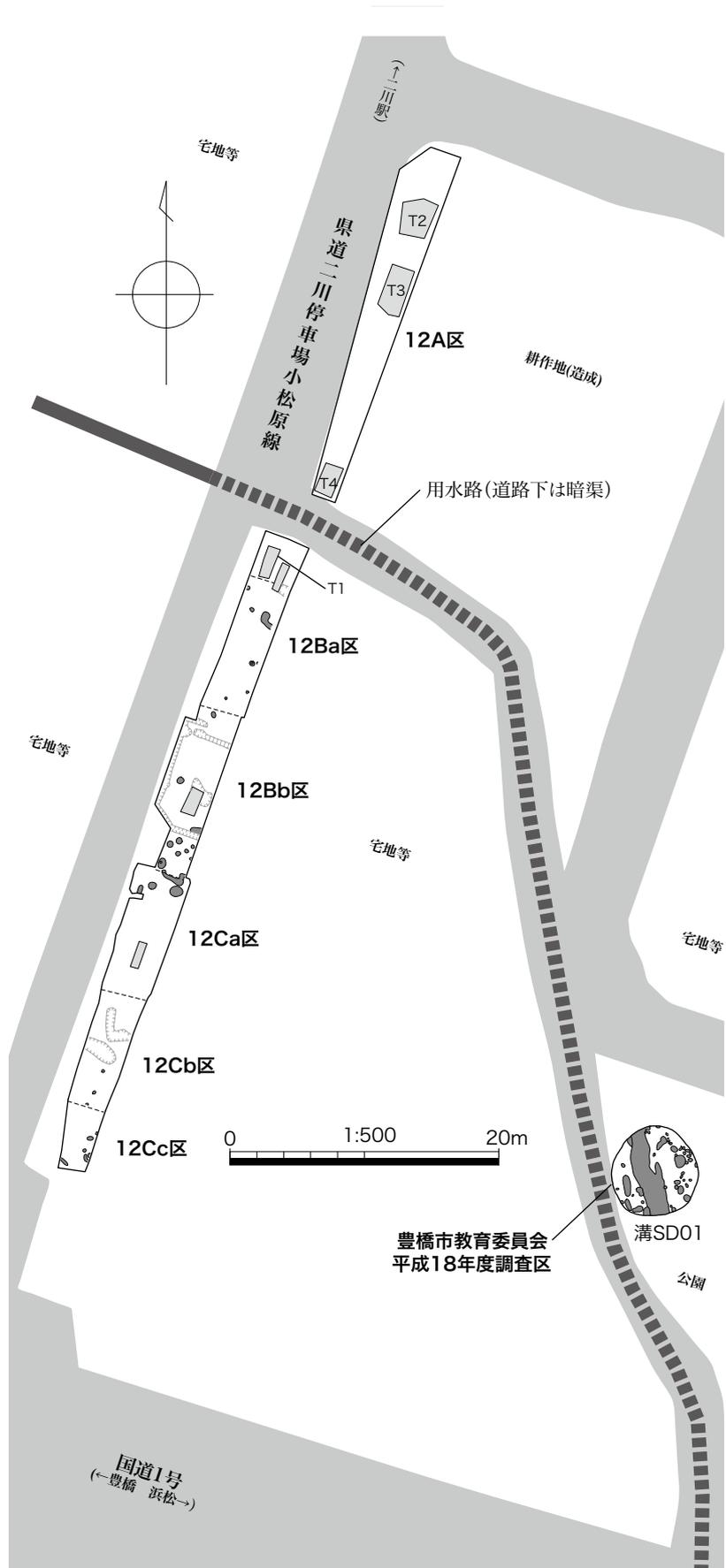


図3 曲松遺跡調査区全体図 (1:500)

**過去の調査** 曲松遺跡では、平成18年度に、豊橋市教育委員会による公園内防火水槽工事に伴う第1次発掘調査が実施されている。それは今次発掘調査区より東へ約40mの地点で、南北溝やピットが検出され、須恵器・山茶碗（灰釉系陶器）が出土している（小林2012）。このことから、当該期の集落が台地上に展開している可能性が予想されていた。

**基本土層** 遺跡は、段丘面を構成する礫混じり粘土層を基盤層とし、基本的には約20cm厚の表土を掘削してあらわれる粘土層上面で遺構が検出される。しかし12Ca区以南では、盛土がなされた分だけ表土が厚く、一方低い地点（12A区）では、削平・水田化された上に盛土がなされている。そのため後者については、狭小な調査区の全面掘削は危険と判断し、3か所のトレンチによって土層の概略を記録して基盤層上面での状況を確認する調査にとどめた。結果、各トレンチで遺構・遺物の検出は全くなかった。また基盤層上面は12B区で緩傾斜であるのに対し、12A区は明らかに水平になっており、比較的近時の削平であることが考えられる（図4）。また12C区も地形改変の痕跡である可能性が高い。

**遺構** 遺構は、12Bb区南半部で比較的良好に検出された。そのほとんどが直径20～50cmのピットである。これらの深さはまちまちで、調査区内で掘立柱建物（または柵）を構成することはなかった。またピット内からの出土遺物もなかった。この他12Ca区の001SXや12Cb・Cc区の直径25cm以下の小ピット群などがあるが、前者は地境溝の可能性が考えられ、後者は小さな柵であったと考えられる。いずれも比較的新しい時期の耕作地に関わるものであろう。これらの遺構からも遺物の出土はなかった。

**遺物** 遺物は、上記のとおり遺構出土のものではなく、表土・包含層掘削中のものに限られる。宅地化された近代以降の陶磁器が約10点あり、近世に遡るものは耕作地であったためか極端に少ない。加えて中世以前のものも皆無に近く、摩滅した須恵器・土師器小片が採集されたにすぎない。しかしそれでも12Cc区調査区東壁を精査中に須恵器箱形杯（E-001）が出土したほか、検出中に山茶碗の小片（E-002）が出土した。前者は、出土位置から耕作による攪拌層のやや窪んだ地点にはまり込んだものとみられ、付近に当該期の遺構があったことの証拠となる。

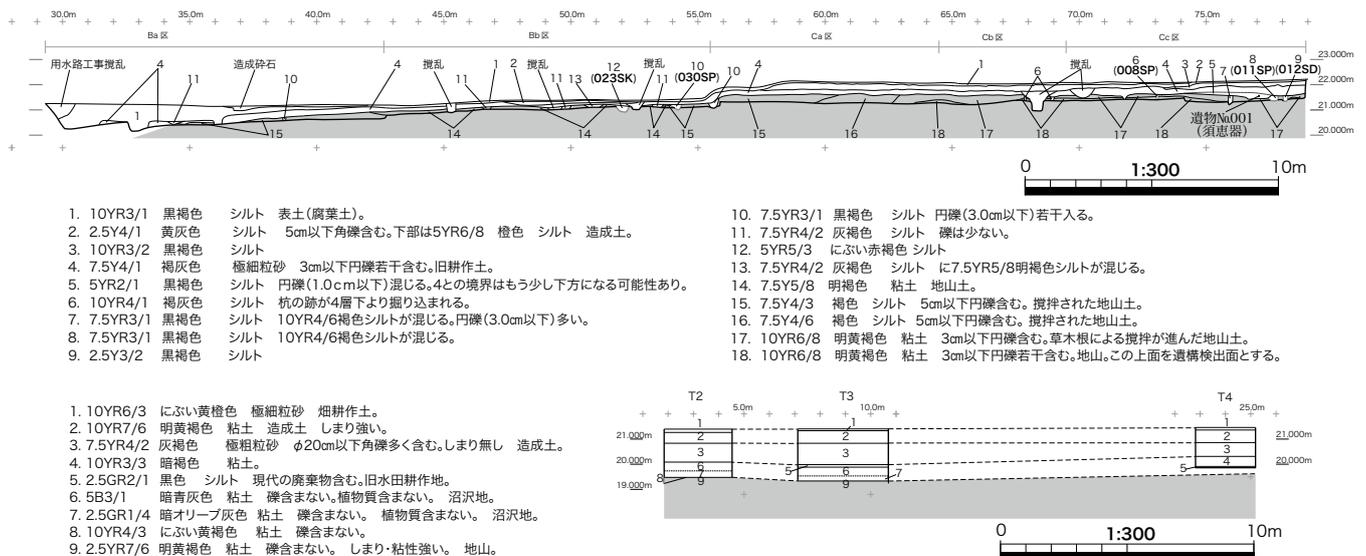


図4 曲松遺跡土層断面図(1:300)

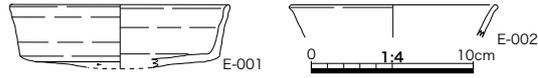
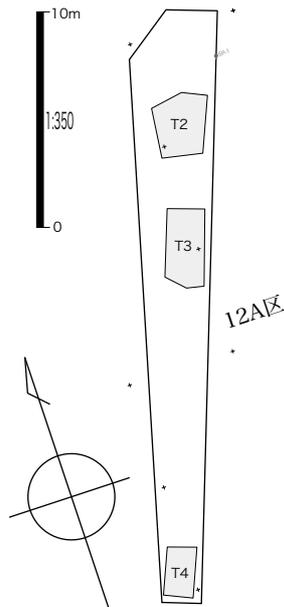


図6 曲松遺跡出土遺物実測図(1:4)

表1 曲松遺跡12A～C区遺構一覧

番号	区	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	埋土
001SK	12Ca	1.74	0.26	0.08	10YR3/1 黒褐色砂質シルト。
002SK	12Ca	0.94	0.81	0.05	7.5YR3/3 暗褐色粘質シルト 直径2cm以下円礫混じる。
003SP	12Ca	0.64	0.57	0.17	7.5YR4/2 灰褐色シルト。
004SD	12Ca (0.60)	0.30	0.08	0.08	7.5YR3/2 暗赤褐色砂質シルト。
005SP	12Cb	0.24	0.20	0.13	5YR2/2 黒褐色シルト に 10YR6/8明黄褐色粘土 が若干混じる。炭化物あり。
006SP	12Cb	0.25	0.17	0.19	7.5YR4/1 褐灰色シルト。
007SP	12Cb	0.23	(0.15)	0.22	5YR2/2 黒褐色シルト。
008SP	12Cc	0.22	(0.17)	0.18	7.5YR3/1 黒褐色シルト に 10YR6/8明黄褐色シルト混じる。直径2～3cmの礫多く混じる。
009SP	12Cc	0.44	0.26	0.32	7.5YR3/1 黒褐色シルト。
010SP	12Cc	0.25	0.22	0.21	7.5YR3/1 黒褐色シルト。
011SP	12Cc	0.37	(0.15)	0.04	2.5Y3/2 黒褐色シルト に 10YR6/8明黄褐色シルト が約半分混じる。
012SD	12Cc	0.61	0.22	0.10	2.5Y3/2 黒褐色シルト。直径1cm以下円礫若干混じる。
013SD	12Cc	0.72	0.21	0.14	7.5YR3/1 黒褐色シルト に 10YR6/8明黄褐色シルト が混じる。直径1cm以下円礫若干混じる。
014SP	12Ba	0.35	0.30	0.06	7.5YR3/1 黒褐色シルト 円礫混じる。
015SP	12Ba	0.32	0.28	0.07	7.5YR3/2 黒褐色シルト 円礫混じる。
016SK	12Ba	1.36	0.34	0.05	7.5YR4/1 褐灰色シルト 円礫混じる。
017SP	12Ba	0.43	0.36	0.10	7.5YR4/2 灰褐色シルト 直径3cm以下の円混じる。
018SP	12Ba	0.12	(0.06)	0.10	7.5YR2/1 黒色シルト 礫少ない。
019SP	12Ba	0.24	0.19	0.09	7.5YR3/2 黒褐色シルト 円礫混じる。
020SP	12Ba	0.20	0.18	0.13	7.5YR2/1 黒色シルト 礫少ない。
021SP	12Bb	0.47	0.33	0.14	5YR5/3 にぶい赤褐色粘質シルト。
022SP	12Bb	0.52	0.50	0.06	10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト。直径2cm以下円礫混じる。
023SK	12Bb	(0.75)	(0.50)	0.43	5YR5/3 にぶい赤褐色粘質シルト。
024SP	12Bb	0.50	0.46	0.12	10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト。直径2cm以下円礫混じる。
025SP	12Bb	0.51	0.49	0.53	10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト。直径2cm以下円礫混じる。
026SP	12Bb	0.25	0.25	0.58	7.5YR5/2 灰褐色シルト。直径2～4cm円礫混じる。
027SP	12Bb	0.29	0.28	0.57	7.5YR5/2 灰褐色シルト。直径2～4cm円礫混じる。
028SP	12Bb	0.37	0.32	0.13	7.5YR5/2 灰褐色シルト。直径2～4cm円礫混じる。
029SP	12Bb	0.81	0.57	0.30	10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト。直径2cm以下円礫混じる。
030SP	12Bb	0.20	(0.15)	0.09	7.5YR5/2 灰褐色シルト。直径2～4cm円礫混じる。

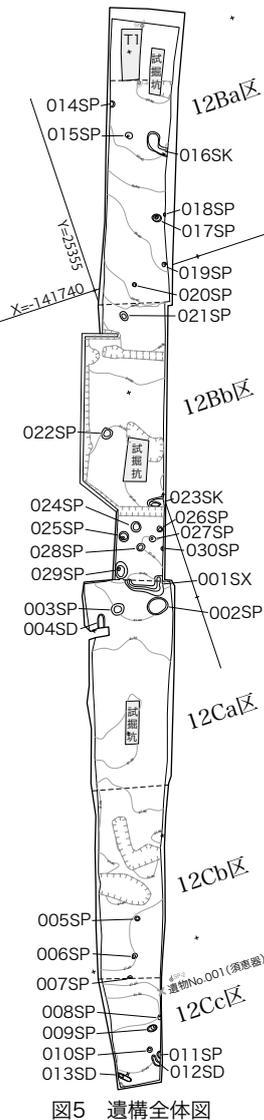


図5 遺構全体図

総括 上記したように、曲松遺跡における今次発掘調査は、豊橋市教育委員会の第1次発掘調査に比べて広い面積を対象としたものの、顕著な遺構・遺物の検出には至らなかった。その理由としては、12A区のように削平を受けていたこともあるが、12B・C区において包含層中からの遺物出土が寡少であったことも考慮すると、当該調査区の位置が遺跡の縁辺に相当していたためとも考えられる。

小規模な古代集落 第1次調査の出土遺物は、8世紀の須恵器と9世紀後半(K-90号窯期)の灰釉陶器、そして12世紀半ば過ぎ(渥美1b型式期)の渥美窯産輪花碗に区分される。まず、8～9世紀の遺物はほとんどが小片であるが一通りの器種が揃っており、小規模・短期間の古代集落が断続的に営まれたと考えられる。そのため遺跡の範囲もそれほど大きくならなかったと推定される。具体的には、今次発掘調査区よりも東側の、沢渡川に沿う台地縁辺が中心だったのであろう。今次発掘調査の成果に加味して以上のような見通しができる。

平安時代末期の輪花碗 一方、12世紀代の輪花碗は、完形やそれに近い状態のものが9点あって、溝(SD01)からまとまって出土している。溝は、現在暗渠となっている用水路と近い位置にあるが、これとは逆に北から南へ向かって低くなっているので別の性格が考えられ、また輪花碗が溝内の凹みに集中している。明らかに須恵器・灰釉陶器と異なる出土状況である。ただし、輪花碗は全て使用痕があるので、窯業生産に関連する遺構でもなさそうである。

中世普門寺領の西端 ところで文献史料では、仁治3年(1242)の「和尚権僧正覚普門寺四至注文写」にある「曲松」の地名が知られる。服部光真氏らの研究(服部2011)によると、三遠国境を越えて広がる普門寺領のうち、近世には「マガリ」と訓じられていた「曲松」が寺領西端の一角を占めていることが明らかにされている。おそらく梅田川が沢渡川との合流点付近で大きく蛇行している様子から、地形の特異点として目印にされやすかったのであろうが、鎌倉時代の普門寺ではそれがまさに領域の目印(四至)のひとつになっていたと考えられるのである。

そのような普門寺が境界と認識する地点で、それに近い時期の輪花碗が多数まとまって出土している第1次調査の成果は、上で総括した集落変遷の中ではきわめて特殊な事象といえ、普門寺とその周辺の景観を復元していくにあたって、今後とも注意していく必要がある。

(永井邦仁)

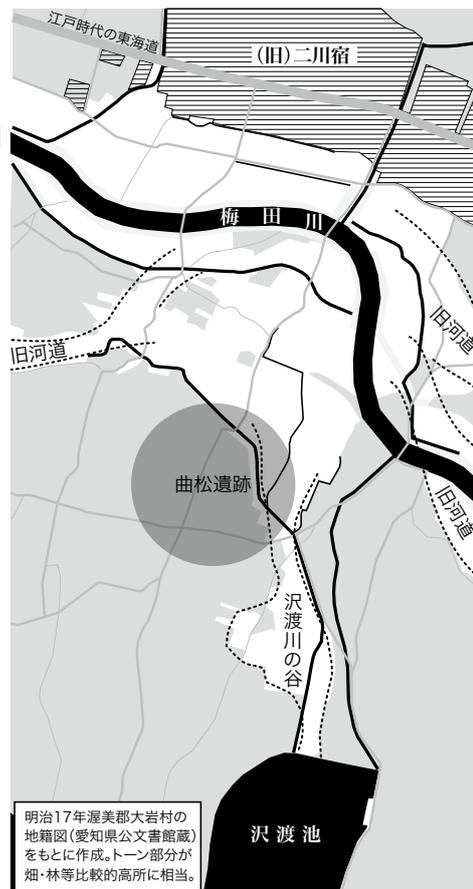


図7 曲松遺跡周辺の古地形環境

(参考文献)

- 岩瀬彰利 2002 『本郷遺跡(Ⅱ)』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第66集
- 小林久彦 2012 「曲松遺跡第1次発掘調査」『市内埋蔵文化財発掘調査平成17～20年度』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第123集
- 服部光真グループ 2011 「中世普門寺領の復元的研究」『平成22年度学生自主企画研究事業報告書』愛知県立大学教育研究センター ([http://www.bur.aichi-pu.ac.jp/kyoken/education/jishu/pdf/h22\\_report.pdf](http://www.bur.aichi-pu.ac.jp/kyoken/education/jishu/pdf/h22_report.pdf))



写真1 曲松遺跡12Bb区遺構検出状況(南から)



写真2 曲松遺跡12Ba区全景(南東から)



写真3 曲松遺跡12Bb区遺構完掘状況(北西から)



写真4 曲松遺跡12Ca区全景(南から)



写真5 曲松遺跡12Cb区全景(北から)



写真6 曲松遺跡12Cc区全景(北から)



写真7 曲松遺跡12Cc区出土須恵器(E-001)

## 抄 録

ふりがな	まがりまついせき							
書 名	曲松遺跡							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	永井邦仁							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL0567(67)4161							
発行年月日	西暦 2013年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まがりまついせき 曲松遺跡	あいちけん とよはしし 愛知県豊橋市 おおいわちよう 大岩町	23207	790568	34度 43分 19秒	137度 26分 36秒	2012.05.07～ 2012.05.25	330㎡	県道小松 原二川停 車場線改 良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
曲松遺跡	集落	奈良時代 ～ 鎌倉時代	ピット、土坑	須恵器(杯)、 山茶碗		古代集落の縁辺		
文書番号	発掘届出(23埋セ第166号・2012.3.7) 通知(23教生第2864号・2012.3.23) 終了届・保管証・発見届(24埋セ第53号・2012.6.5) 鑑定通知(24豊教美第145号・2012.6.21)							
要約	本遺跡は、梅田川と沢渡川の合流点に形成された古代・中世の集落遺跡である。従前の発掘調査で多数の山茶碗が出土したが、今回の発掘調査では遺構・遺物ともに寡少であった。一部は削平による滅失の可能性もあるが、元々集落の縁辺であったためと考えられる。このことから、該期の集落は梅田川よりも沢渡川沿いの狭小な範囲に限られたものと想定される。							



# 年報 平成24年度

---

平成25年3月

編集・発行 (公財)愛知県教育・スポーツ振興財団  
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 栄印刷株式会社

---